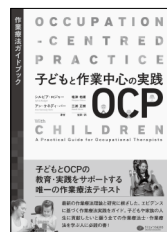


シルビア・ロジャー、アン・ケネディ・パー（編）
塩津 裕康，三浦 正樹（監訳・訳）

子どもと作業中心の実践 OCP 作業療法ガイドブック

酒 井 康 年

（うめだ・あけぼの学園，副園長/日本作業療法士協会，常務理事）



尊敬する OT の 1 人である小松則登氏が「作業療法士だから作業療法すればいい」と宣言をしたのはいつだったか。この言葉を間に置き、何度語り合ったか。10 年以上の歳月が流れている。「作業療法とは？」、「作業療法士とは？」という、OT であれば誰もが一度や二度はもつ疑問に正面からぶつかってもがいていた自分は、小松氏の発した宣言にとっても勇気づけられたことを思い出した。その想いからは「作業療法の中核である作業への関心が復活している」、「作業療法実践における作業中心の位置づけを、作業の「ルネッサンス」と呼ぶ者もいる」（本文 p19）という言葉に感動すら覚えて読み進めた。この本は、書名の通り、子ども領域の作業療法における作業中心の実践が集約され、紹介されているのである。

機能的側面のみ焦点を当てた場合と、作業中心では何が異なるのか。次の文に端的に表現されている。「作業療法介入が適切であるためには、スキルや作業の獲得を超えて、子どもの生活上の役割への参加を最適化することにまで及ばなければならない」、「作業療法最大の目標は、家庭、学校、地域社会における子どもの能力と参加を促進することである」（本文 p30）。つまり、正しい鉛筆の持ち方、よい姿勢がとれる、ブランコに乗れるようになる、それは、子どもの参加をより可能にするものかどうか、そのことが問われているのである。セラピールームの中であって、そこにいる子どもを見

て、その場のその姿だけを評価し、介入の成果としても、専門的な用語で理解し納得をするだけでは、セラピストの自己満足であると M 氏は痛烈に批判をした。ただし、セラピールームの中でのセラピーが批判されているのではない。たった 1 回の閉じられた空間におけるセラピーであっても、その子の人生を変える可能性があることは、わが師小西紀一氏が存分に示してくれている。われわれ一般人は、どうすればその域のセラピーを展開できるのだろうか。そのヒントのいくつかがこの本に十分に示されている。

機能的側面に焦点を当てるのが批判されているわけでもない。「機能的側面のみ」では十分ではないのである。その機能が、生活の作業遂行に、参加に、どのように結びついているか、そこを理解しよう、融合させようと提言されているのである。

この本のすべてのプロセスで、作業遂行と参加に焦点を当てることが繰り返し強調されている。一方、疾患別のアプローチは基本的に紹介されない。具体的事例は紹介されているので、知的障害があったり、肢体不自由があったりする例は出てくるが、診断名が明確に記載されていないものもある。「問題」は診断名にあるわけではないからである。

ちなみに、この本では作業 = occupation についての解説は含まれていない。作業や作業的存在、生態学的モデル、ICF といった概念になじみがない場合には、下調

べをしてから取り組むほうがスムーズに読めるかもしれないが、わかりやすい記載になっているので、恐れずにトライすることも悪くない。

この本は 2017 年に発行された原書第 2 版の翻訳である。しかし、翻訳であることを忘れるくらい、とてもわかりやすく日本語化されている。この貴重な本を紹介しただけでなく、これだけわかりやすい適切な日本語（と私は感じた）で記載をくださった訳者たちに大いに感謝する。監訳者の塩津氏はこう呼びかけている。「日本という文脈の土壌で「作業中心の実践」を育むためにはみなさんの実践が必須です。ともに日本の作業中心の実践を育んでいきましょう」。そして三浦氏は、10 年後の読者に「本書が「あたりまえのことしか書いていない」状況になっていることを願います」（ともに本文 p387）と。これまでの 10 年で日本の作業療法の景色も大きく変わったと実感している。追い求め、悩み、実践の時を重ねればこの先の 10 年後、必ず新しい景色があるはず。

「あなたは作業療法士ですか？」、「作業療法の専門性とはなんですか？」、この問いに戸惑う場合には、この本を開くことを強くお勧めする。作業療法に対する誇りと自信を確認することができ、そのことに対するエビデンスを手にいれることができると、私は思うから。

B5 判 388 頁 4,500 円＋税
クリエイツかもがわ刊
☎ 075-661-5741